

文献紹介

B.W. バックス著『東洋の海』（1875年、ロンドン）

原 田 信 男

小稿は、国際日本文化研究センターの白幡洋三郎氏主宰の共同研究“19世紀の日本「発見」”において課せられた同センター図書館所蔵の洋書紹介の一部をなす。筆者が担当したのは、以下の書籍である。

The Eastern Seas

By Captain B. W. Bax, R.N.

Being a Narrative of the Voyage of H.M.S. “Dwarf” in China, Japan, and Formosa.

With a Description of the Coast of Russian Tartary and Eastern Siberia, from the River Amur.

London : John Murray, 1875

まず最初に、全体構成を知るために、目次と挿画一覧を紹介し、このうち日本を対象とした4葉については末尾に掲げる。

《目 次》

第1章

1871年4月のイギリス出発と英国軍艦ターマー号との通航——セントビンセント島——アセンション島——セントヘレナ島——ケープタウン港——ナタール港——モーリシャス島——シンガポール——ホンコン（香港）——1871年6月18日の英国軍艦ドワーフ号の任務——ホンコンの台風——アモイ（廈門）——スワトウ（汕頭）——台湾のタカウ（高雄）——バクサ（木柵＝台南県南化郷）への旅——タイワンフー（台湾府＝台南）

第2章

台湾の歴史

第3章

アモイ周辺——北川遡上行——台湾の浜での停泊——アモイ南西の伝導所への訪問——フーチョウ（福州）伝導所——キールン（基隆）——サウオ（蘇澳）湾——琉球島——タンスイ（淡水）

第4章

江戸号の海難——クーシャンマウンティン（鼓山）の仏教修行所——台湾のトワトティア（大稻埕）での騒動——内陸未開部族への訪問——フーチョウ（福州）の兵器庫での祝宴

第5章

西洋風中国帆船の搜索——チンチェウ（錦州）——日本への到着——神戸・長崎までの最高司令官の同行

第6章

タタリア地方におけるロシア占領地および東シベリアへの航海——蝦夷島

第7章

日本での富士登山

第8章

神戸——シャンハイ（上海）——船乗りたちの家庭——日本の佐賀の乱——沈没帆船乗組員の搜索——風揚げ大会

第9章

日本の台湾遠征——ペリリユー島（宮古島・八重山島の誤）から基隆への3艘のカヌーの到着——台湾南部リンキュウ（瑯嶠）における日本駐屯地

第10章

長崎——1874年8月20日の台風の影響——シャンハイ——チンキアン（鎮江）——ナンキン——ニンポー——ホンコン——1874年11月30日の新しい艦隊による救援

《図一覧》

口絵（大）	箱根からみた富士山（図1）（図1～4は本誌、65頁参照）
19頁	米の脱穀
29頁	バクサ（木柵）の平埔番の母子
35頁	台湾の筏船
57頁（大）	中国軍による廈門占領
61頁	水田へのポンプ揚水（注：龍骨車）
64頁	廈門における祖先の甕棺墓

124頁	台湾における未開民族の男女
153頁（中）	1636年にキリスト教徒が絶壁から身を投げたパッペボルグ島（高鉾島：図2）
160頁（中）	東シベリアのウラジオストック
163頁	V字型の女子の婚礼行列
199頁	日本の山苦力（図3）
222頁	日本のジャンク（平底船：図4）

（※他に37・38頁の間に折込の台湾地図があるが、省略。なお図の大きさは大・中1頁、他は挿画）

《内 容》

英国帝国海軍の大佐である B.W. バックスは、英国軍艦ドワーフ号の艦長として、1871年4月11日に、同じくターマー号とともにイギリスを出発し、東洋の海へと向かい、中国東南部・台湾・琉球・日本・蝦夷地および東シベリアを訪れ、1874年11月30日に香港から帰国した。本書は、そのバックスが記した3年8ヶ月にわたる航海記である。バックスは、さまざまな航海中の実体験や見聞を記しているが、東洋に関する知識については、いくつかの参考文献に拠った旨を序文に記している。

その第一は、イエズス会宣教師アントニー・ゴービルの『中国と琉球島に関する覚書』で、同書は『中山伝信録』を元にしたもののフランス語訳（Gaubil, Antoine, *Le P. Memoire sur la Isles que les Chinois appelle isles de Lieu-kiou, Letters Edifiantes et Curieuses*, Vol.23, Paris, 1781）。またディクソンの『日本』（Walter, Dickson. *Japan, Being a Sketch of the History, Government and Officers of the Empire*: William Blackwood and Sons, Edinburgh and London 1869）のほか、ペイジール・ホールの『朝鮮・琉球航海記』（Hall, Basil. *An Account of a Voyage of Discovery to the West Coast of Corea and the Great Loo-Choo Island, with an appendix containing charts, and various hydrographical and scientific notices, and a vocabular of the Loo-Choo language* by H.J. Clifford, Esq. London, 1818, 邦訳『朝鮮・琉球航海記』春名徹訳, 岩波文庫, 1986）、フレデリック・ビーチーの『太平洋航海踏査録』（Beechey, Capt. Frederic W. *Narrative of a Voyage to the Pacific and Beering's Strait, to Co-operate with the polar Expeditions: performed in the Years 1825, 26, 27, 28*. London, 1831, 邦訳（部分）『プロッサム号来琉記』大熊良一訳, 第一書房, 1979）などを参照している。最後の2冊は同じ英国海軍キャプテンたちの航海記で、前者は1818年のアルセスト号、後者は1831年のプロッサム号によるものであった。

こうした予備知識をもとにイギリスを出発したバックスは、セントビンセント島・セントヘレナ島などを通してケープタウンに入り、モーリシャス島を経てシンガポール・香港に着いた。その後、廈門・汕頭などを訪れた上で台湾の高雄に至っている。ドワーフ号は、中国では廈門・福州を拠点として動き回り、台湾では基隆や淡水などを訪れ、上陸して台湾先住民の集落への探検旅行を行ったりしている。むしろ第2章を台湾の歴史にあてたり、台湾全図を掲げたりするなど、ドワーフ号の任務もしくは関心が、台湾に大きく向いていたように思われる。

なお、この間に1872年9月10日には琉球島を訪れ、那覇に3日ほど滞在した。先にも述べたように、ボックスはホルの『朝鮮・琉球航海記』を参考としていたが、当時のアルセスト号の水兵一人が異国の地で不慮の死を遂げ、泊港近くの外人墓地に葬られていた。ボックスは、その墓地を訪れ、同胞の墓標を確認して、その霊を弔っている。この他、首里城を丘から臨んだり、ドワーフ号の上で琉球役人との交歓を行ったりしている。この時に、琉球側から送られた食料の返礼として、毛布・織物・絵画・書籍などを送り、国王宛の礼状を手渡している。またボックスは、ホルやピーチーの記述や自らの見聞に基づき、琉球の歴史や風俗に関する記述を行っている。

その後、ドワーフ号が横浜を目指して香港を発ったのは、1873（明治6）年5月31日であった。日本では、豊後水道に入り瀬戸内海を通過して、石炭補給のため神戸に立ち寄り、6月25日に横浜に着いている。横浜に上陸したボックス一行は、江戸（東京）に向かい、“大君”の廟朝のある寺院（増上寺）や劇場などを見学している。ボックスは、シンプルな寺院や劇場などの建築物に関心を示しているが、役者の演技は単調だとしている。おそらく能を見たのであろうか。

またボックスは、日本海軍は非常な進歩を遂げつつあると評価しているが、その背景には、イギリス海軍の援助があったことを強調している。事実、日本を含む東洋の海には、かなり多くのイギリス海軍の軍艦が航行しており、適宜、艦隊が編成された。このあと7月11日に、ドワーフ号は横浜を去り再び神戸へと向かったが、この時、ドワーフ号は、アイロンデューク号を旗艦とし、ディステイル号を従えた艦隊の指揮下に入っている。

彼らは神戸に停泊し、大阪や京都を訪れた。神戸と大阪を比較して、外国との商取引において神戸が著しく発展しつつあることや、イギリス人技師の指導の下で、日本の工場労働者がよく働いていることなどを指摘している。大阪の造幣局や京都の神社仏閣なども見学している。また大阪に上陸したイギリス人のウィリアム・アダマス（三浦按針）について触れ、徳川家康の外交顧問として旗本並みの扱いを受けたことを記している。

その後、ボックスは明石城を訪れ、軍人らしく城の詳細を観察しているが、そのかつての領主をキリシタン大名であった有馬氏としている。これは播磨国有馬荘が、有馬氏の本貫であったことによるが、この有馬氏は赤松系の一族で、キリシタン大名として知られるのは肥前国有馬荘の有馬氏である。ある程度は日本史に関する予備知識を持っていたボックスは、神戸と明石の間にある有馬から、キリシタン大名の有馬晴信を思い浮かべ、誤認したものと思われる。

7月15日、ドワーフ号の艦隊は神戸を出港し、瀬戸内海を通過して下関に向かった。下関海峡を18日に通過したが、この時には、1862（63）年に、長州藩がイギリス艦船に砲撃を加えて、馬関戦争の原因となった事件を思い起こしている。さらに艦隊は、平戸を通過して長崎に向かった。

ここでボックスは、ディクソンの『日本』第6章および第11章をもとに、日本におけるキリシタンの歴史に触れている。なお長崎湾の入り口にある高鉾島の絶壁から落とされて殉教した人々の悲劇についても綴っているが、これは1617年のことである。おそらく彼が1636年としたのは、ディクソンの書にある同年の第4次鎖国令によるキリスト教徒弾圧と混同したものと思われる。またボックスは、長崎港の風景を褒めるとともに、天草地方の石炭採掘についても触れ、炭鉱ではイギリス

人技師がマネジメントを行っていることも指摘している。

その後、司令官の意向でドワーフ号は、モスキート号とともに、同じくアイロンデューク号を旗艦とする艦隊を編成し、タータリアおよび東シベリアにおけるロシア占領地を訪れることになった。艦隊は7月26日にアムール川を目指して出発し、対馬・朝鮮付近を通過してウラジオストックに至り、さらにウランゲル湾で英国軍艦・エルク号が合流するところとなった。ロシアは、タータリアおよび東シベリアの占領地に、ギリシャ正教会や学校などを建てるとともに、日本・中国・朝鮮などを念頭に港の防禦を固めている。さらにバックスは、沿海州の行政の中心で、かつロシア海軍の主港でもあったニコラエフスクにも行き、サハリンの問題も含めて、ロシア側の様子を細かく観察し記録している。

沿海州からの帰りに、アイロンデューク号とドワーフ号は、蝦夷地（北海道）にも立ち寄っている。石狩から上陸して、村落や開拓の様子などに触れ、全体として蝦夷地が不毛の地であることや、アイヌの人々が日本人に侮蔑的な扱いを受けていることなどを記している。艦隊編成は、途中で何度か入れ替わったが、最終的にはアイロンデューク号・フローリック号・ディステイル号・ドワーフ号の4艦となり、9月27日に箱館を発ち、南部に立ち寄って10月2日に横浜へと向かった。

10月6日、艦隊長とその秘書およびバックスの3人は、長い航海の疲れを癒すため、最高司令官から許可をもらい、横浜を発って内陸の小旅行に出かけた。一行は、箱根に向かい、小田原まで馬車を利用した。そこから歩いて山道を登り、宮ノ下を目指した。宮ノ下では温泉に入り、日本庭園や池の鯉などを楽しみ、広大な風景を堪能して数日を過ごした。御殿場の公衆浴場では、混浴や湯女さらには既婚女性たちのお歯黒に驚いている。そして富士登山を決意し、かなりの悪戦苦闘を強いられながらも、さすがに軍人の精神力で乗り切り、登頂に成功した。秋の富士登山は、気候的にもかなり厳しいものがあったようである。箱根には、バックスたちの他にも何人かのヨーロッパ人が休養にきており、すでに明治6年段階で、芦ノ湖や富士などの眺望の素晴らしさが知られていたことが窺われる。バックスも、これを絶賛し、箱根関所跡や小田原城などを見学している。

小田原からは、歩いたり人力車に乗ったり、あるいは籠を用いたりしながら、東海道を横浜へと向かった。その途中、小田原の魚市や、藤沢付近の水田風景、さらには鎌倉の大仏などの印象を記しつつ、鎌倉の歴史にも触れている。おそらく生麦あたりで、薩摩藩士がイギリス人商人・リチャードソンを殺傷した事件を思い起こしたものと思われ、これを契機とする薩英戦争の問題にも筆が及んでいる。

10月28日、ドワーフ号は横浜を離れ、紀伊水道を通過して、三度神戸へと向かった。瀬戸内海の美しさを讃えつつ一周したり、甕島・五島列島などにも足を延ばし、さらには上海を訪れるなど、神戸や長崎を拠点に、しばらく航海を続けたが、この間にバックスは、日本での二つの歴史的な大事件に遭遇する。その第一は佐賀の乱であった。日本国内では不平氏族の不満がたまり、その解決策として征韓論を主張する一派があったが、この問題にこじれて下野した江藤新平が、佐賀で起こした士族の反乱事件である。1874年2月21日、ドワーフ号に長崎から電報が入って、急遽、リングドーブ号などとともに艦隊を編成して佐賀に向かうよう命ぜられており、この反乱事件の原因が、廃

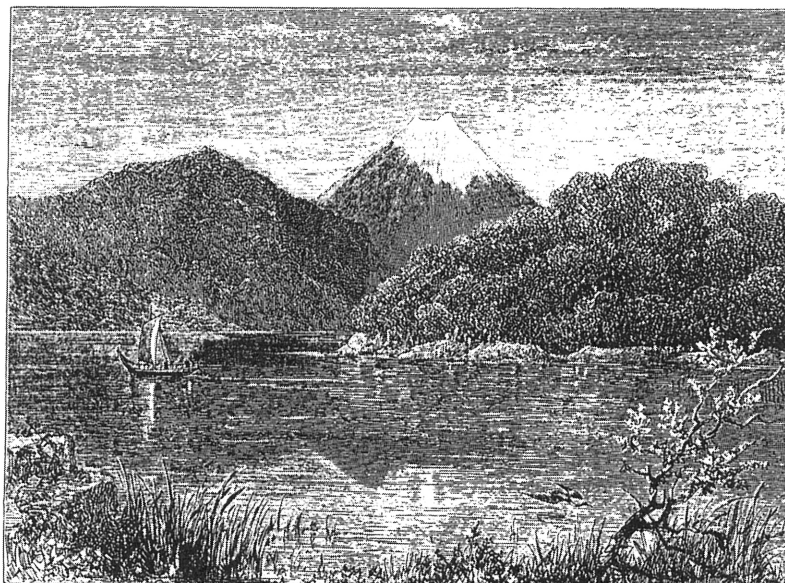
藩置県における俸給米の問題や、征韓論の行方に対する不平氏族の不満にあることなどが論じられている。

第二の事件は、日本の台湾出兵である。1874年、清国台湾に、開国後の日本が初めて海外派兵を実施したもので、1871年、台湾に漂着した宮古・八重山からの琉球船の乗組員50数名が殺害された事件や、翌々年に岡山県の船民が略奪されたことが征討の理由であった。この事件も同じく不平氏族の不満解消のために、その矛先を台湾に向けさせたもので、西郷従道が独断で出兵を実行したとされている。これに対してイギリスは、アメリカとともに強く反対し、最終的にはイギリスの斡旋で和議に至っている。そうしたなかで、日本周辺にいたイギリス軍艦は、台湾への直行を命じられ、ドワーフ号は5月25日に長崎を発って台湾に向かっている。西郷にも面会したバックスは、古代日本の神宮皇后による朝鮮出兵などを引き合いに出しながら、この問題について一章を割いて詳しく論じている。ただしバックスは、台湾への漂着船をペリリュー島からのものと誤解しており、斡旋にあたったイギリス海軍内部にも、必ずしも正確な情報が流れていなかったことが窺われる。

この後、台風の被害にあった長崎に戻ったが、ついに1874年8月15日、日本を離れて上海へと旅立ち、南京や寧波から香港に入って、イギリスへの帰国の途に就いた。目次に示されたように東洋の海を縦横に往来し、さまざまな見聞や体験を盛り込んだ本書は、一部に伝聞や誤認などによる不正確な歴史的記述も少なくない。しかし各地の見聞や率直な感想など、基本的には明治初期における中国・台湾・琉球・日本・東シベリアの実情を記録した史料として、大いに検討に値するものといえよう。

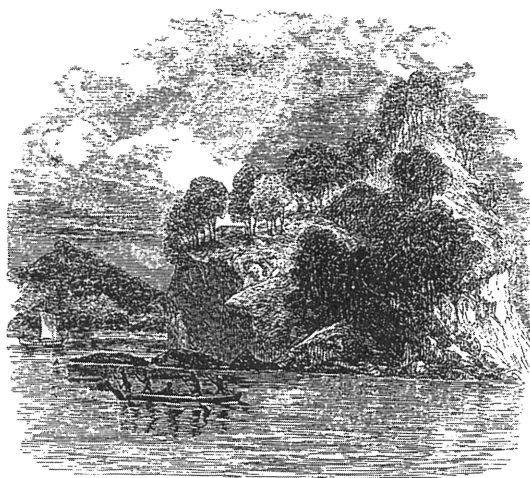
《付記》小稿を成すにあたり、一部の台湾地名などについて、山田仁史氏からのご教示を得た。

記して感謝したい。



FUSI-YAMA MOUNTAIN, FROM HACONE.

図 1 (口絵)



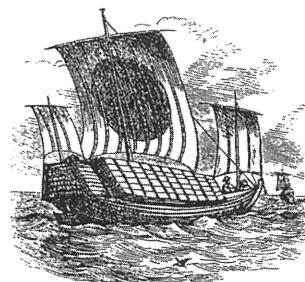
PAPPENBORG ISLAND, WHERE THE CHRISTIANS
WERE THROWN OVER THE CLIFF, A.D. 1636.

図 2 (153頁)



JAPANESE MOUNTAIN COOLIE.

図 3 (199頁)



JAPANESE JUNK.

図 4 (222頁)